

Buddhaguhya 作『チベット王への師の書簡』について

山本匠一郎

はじめに

仏教者が王に宛てた手紙に、有名なものとして龍樹がときのシャータヴァーハナ王に送った書簡『勸誡王頌』(*Surllekha*)がある。龍樹は王の教導役を担い、王が平等の心をもって利他につとめるべきことを淳々と説いており、仏教者が王権に対してどのような姿勢でのぞむべきかの模範が示されている。こうした仏教の基本姿勢は、龍樹以降の、いな釈尊以来の伝統といってよい¹⁾。

Buddhaguhya にもまた、王に宛てた書簡が存在する。Buddhaguhya が生きた8世紀という時代は、ハルシャの帝国以後の混乱の時代である。政治的には諸侯(サーマンタ)が領地を分割統治するサーマンタ体制が敷かれ、各地の王侯はバラモンと結託してヒンドゥーカーストを強化していった。この時代に Buddhaguhya が見出した育成すべき王は、すでにインドになく、チベットの王に求められた。チベットの賢王として名高い Khri-srong-lde-btzan (742-797) その人である。Buddhaguhya は彼の王へ書簡を送り、その持てる教えをすべてチベットへと伝えた。その後、仏教はインドの歴史の表舞台から大きく退き、チベットへとその命脈を保っていくことになる。

ここでは仏法と王法との関係という問題に触れる余裕はないが、Buddhaguhya がチベット王 Khri-srong-lde-btzan に宛てた書簡を参照することによって、王権に対する仏教者のひとつの態度をうかがうことができるし、またチベット仏教流伝初期における政治的・宗教的状况について知ることができる。

すでに長沢実導[1978]²⁾や羽田野伯猷[1987]³⁾によって Buddhaguhya の書簡の重要性が指摘されているが、ここでは、基礎的な和訳資料を提供することを目的とし、さらに先行研究における問題点を指摘することによって、今後の Buddhaguhya 研究の資としたい。

『チベット王への師の書簡』の資料

Toh. №4194/Ota. №5693

Sangs-rgyas-gsang-ba (Buddhaguhya), *Bod rje'bangs dang btzun pa rnams la spring yig.* (Colophon Title: *Bod btzun rnams la brdzangs pa'i spring yig.*

Skt.: *Bhoṭasvāmidāśagurulekha.*

——本書簡の和訳には長沢実導[1978]がある。これは北京版に依拠した抄訳であり、全体の五分の一ほどの分量である。また本書簡に関連した研究に、羽田野伯猷[1987]があり、書簡を部分的に訳出し、その歴史的な背景について考察している。

本書簡は4つのパートから構成される。

1. 王宛の書簡 D135a⁴-137a³/P404b⁴-407a⁵
2. 諸大臣宛の書簡 D137a³-137b⁷/P407a⁵-408a⁶
3. 大修習者宛の書簡 D137b⁷-138a⁴/P408a⁶-408b⁴
4. 一般僧宛の書簡 D138a⁴-139a⁵/P408b⁴-410a²

王宛の書簡の分量が最も長く全体の約半分を占める。次いで一般僧宛の書簡、諸大臣宛の書簡、大修習者宛の書簡の順となる。書簡における Buddhaguhya の一貫とした姿勢は、指導者としての立場にのっとり、まさしくそれぞれに宛てた相手に対して面前と向かっているかのごとくに、人としてあるべき道を説いている。

書簡の制作年代の諸説

本書簡が作成された年代は正確には不明とされてきたが、bSam-yas 寺定礎(775)および完成(787)の時期から、Khri-srong-lde-btzan(742-797)の没年までの間であることは確定的である。さらに詳しい年代推定については後述したい。

書簡には、大翻訳師 Vairocana に加えて、sKa-ba dPal-brtzegs、Cog-ro Klu'irgyal-mtsan、Zang sNa-nam Ye-shes-sde、すなわち「Ka Cog Zang の三人」といった著名な翻訳師の名前が挙がっており、彼ら大翻訳師が仏典をたゆまず翻訳中であることを伝えている。さらに dBa' Mañjuśrī (dBa' gSal-s nang, Ye-shes-dbang-po) が、Buddhaguhya をチベットに招聘する使者として来印したことを伝えている。彼らはすべて、8世紀のチベットにおける仏教興隆事業の最大の立役者たちである。

こうした翻訳師たちはもともと貴族であり、宮廷の事情に詳しく、Buddhaguhya と際会した折には、Khri-srong-lde-btzan 周辺の政治的環境について伝えていたものであろう。書簡には、宮廷でおこった具体的なトラブルと、それに対する指導や教誡の言葉がちりばめられている。こうした言葉を丁寧に考察することをとおして、制作年代をおのずと推定することができる。

ちなみに長沢は、制作年代を Khri-srong-lde-btzan の仏教入信(20 歳)の直後と考え、761 年と設定しているが、この設定には無理がある。bSam-yas 寺に Buddhaguhya を招聘しようとした事蹟が書簡に見えるので、bSam-yas 寺建立以前ではありえない。

また羽田野は、本書簡が真作であれば、この書簡が製作された時期は「チベットにおける翻訳時代に入ろうとした時代」であるとし、Buddhaguhya の招聘使の派遣を「サムイェー建立と平行しておこなわれた翻訳の準備時代のできごとであった、とみることもできようが、しかし、サムイェー完成後の盛大な訳経時代に入ろうとするころということにもなろう」と示唆する。さらに羽田野が主唱する書簡の偽作説について、その問題点を検討していくことにしたい。

書簡の問題点 1. 60 歳薨去説について

Buddhaguhya の書簡は、先行研究でもかなり意見が異なる箇所がある。それが、Buddhaguhya、または Khri-srong-lde-btzan の 60 歳逝去を説くとされる一文である。その一文とは次のようである。

「力少なき身体において、伝承を余すことなく、59 歳まで翻訳を行なってください。60 歳には出世間して、他の王国に生を受けることになりましょう。」⁴⁾

——この箇所の文脈は、Buddhaguhya が王に対して基礎的な翻訳事業の推進を要請している場面であると考えられるが、この部分の和訳に関して、長沢実導、羽田野伯猷とも解釈が異なる。

長沢説はこの部分の主語を Buddhaguhya と考え、このとき Buddhaguhya が 59 歳であったとする⁵⁾。すなわち「Buddhaguhya は体力が乏しいながらも 59 歳まで法輪を転じてきました」とするわけである。しかしこの一文の述語は尊敬語で書かれており、王に宛てた Buddhaguhya の言葉であるから、尊敬語の主語が Buddhaguhya ではありえない。

問題は羽田野説である。羽田野は、この箇所を Buddhaguhya が Khri-srong-

lde-btzan に寿命を授記(予言)したものと考え、この点をもって本書簡を「後世の作為的なものという公算は大きい」とし「この書翰が由緒正しい伝統を持って明確な存在として広く知られて伝承され、真作として常に評価されてきたものかどうか問題がないわけではない」⁶⁾と疑義を呈している。

Khri-srong-lde-btzan の薨去年代に関しては異説があるが、それについては他の先行研究を参照されたい⁷⁾。問題は、この一文が王の寿命を予言したものであるかどうかという点である。Buddhaguhya が Khri-srong-lde-btzan に要請しているのは仏典翻訳事業の推進である。この要請は本書簡にしばしば散見される⁸⁾。つまりこの箇所は、たんに翻訳事業の見通しを述べたものであって、王の寿命の予言などではない。60 歳での出世間ということは、王に対して事業遂行後の出家(引退)をうながしたものととらえるべきであると考ええる。その事業の見通しは、王の 60 歳を目処としたものであった。

またこの一文の冒頭に「力少なき身体において」とあるように、この頃の Khri-srong-lde-btzan はかなり身体を病んでいた可能性がある。王宛書簡の最終場面で王の徳を海の徳に比す箇所があるが、そこで「不具な手を四方に広げる」という表現がある。これなどは、王の手がすでに老化のため不自由であったことを伝えるものではなかろうか。

なお「60 歳には出世間して、他の王国に生を受けることになりましょう」という文を、羽田野は遷化のことととらえるが、これもたんに出家して生まれ変わるという意味であろう。前文に「二度の生をもって利他を為してください」⁹⁾とあるように、王として世間における利他を行ない、僧となって出世間における利他を行なうという意味であろう。王に出世間を勧めるのは、たとえば龍樹『勸誡王頌』¹⁰⁾などにも見られる仏教の王権に対する伝統的態度といえる。

しかし Khri-srong-lde-btzan は 60 歳まで存命することはできなかった。Khri-srong-lde-btzan は 56 歳で逝去してしまう(797 年)。すなわち王は、Buddhaguhya から自らの寿命以上の仕事の遂行を求められていたのである。王は翻訳事業の完遂を見届けることなく、56 歳で逝去された。つまりこの箇所は羽田野が主張するように Khri-srong-lde-btzan の 60 歳逝去を Buddhaguhya が予言したものではなくて、翻訳事業の完遂が Khri-srong-lde-btzan の 60 歳を目処としていた、その見通しを述べたものであると考ええるべきである。本書簡を「後世の作為的なもの」とする羽田野の偽作説は穿ちすぎな見方であるように思われる。

書簡の問題点 2. 制作年代の再考

ここで書簡が示唆する歴史的な状況から、制作年代のさらに精しい推定をしたい。

8世紀の末期、チベットは仏教を国教化して導入するにあたり、インドと中国のどちらからの仏教を優先して招来するかという仏教内の教線争い(794年・bSam-yasの争論)と、さらにはボン教などの巫呪宗教や先祖伝来の習俗を守ろうとする抵抗勢力との相剋状態にあって、仏教界はさまざまな迫害を蒙っていた¹¹⁾。Buddhaguhyaによれば「(チベットは)学匠を受容するのに性急であって、あらゆる見解に対して騒然となっている」¹²⁾思想紊乱の状況、さらには「過失をわきまえず、正法を破却せしめては、地獄の因を増やして(仏)果を絶やす」¹³⁾排仏運動の存在を伝える。政争が続き「チベットの王国の政治の城堡も、文官以下の政治の城堡は崩れつつある」¹⁴⁾政情にあった。

こうした政治的な混乱状況が続いているなかで、ひとつの不祥事が起こる。Khri-srong-lde-btzanの第三子Mu-tig-btzan-po(775-803)が殺人を行い、北方に追放されてしまうのである(795年)。これによりKhri-srong-lde-btzanは長子Mune-btzan-poに王位を譲らざるを得なくなるが、この長子はわずか29歳でKhri-srong-lde-btzan在世中に母親によって弑された。第二子は幼少時に亡くなっており、第三子は北方に追放されてしまったので、第四子Khri-lde-srong-brtzan(776-815)が即位した。Buddhaguhyaの書簡に「政治によって誰かを降ろすときには、息子をあきらめずには障害を避けられません」という文言があるが、これはこうした宮廷の政治的混乱について示唆したものと考えられよう。また諸大臣宛の書簡には、妻や親族における不和や喧嘩などさまざまな禍いを説くが、こうした親族間の不和に対してBuddhaguhyaはきびしい教導を行なっている。

こうした政治的混乱や息子たちの不祥事が795年周辺に起こっている。Buddhaguhyaの書簡は、老王Khri-srong-lde-btzanが「力少なき身体」となり「非時をつねに心に留めておく」必要があって、60歳を見据えたKhri-srong-lde-btzan最晩年の795年から797年の間に作成されたものと考えられよう。

書簡に見られる教学理念

Buddhaguhyaは仏典翻訳事業を何より奨励している。Khri-srong-lde-btzanに対して要請しているのはまさしくこの点であって、さらに注目すべきは、のちに

Ye-shes-sde によって果たされることになる翻訳法の基準設定(『翻訳名義大集』*Mahāvvyutpatti*の作成)を指示している点である。

『大日経』研究にとって最大の関心事は、このとき本書簡とともに『大日経広釈』または『大日経略釈』、『金剛頂経』の注釈 *Tantrārthāvatāra* が送られたことである。Buddhaguhya を bSam-yas 寺に招聘するために、試みの7人のひとり dBas Mañjuśrī と Bran-ka Mu-ti-ta がインドへと派遣されたが、Buddhaguhya は高齢と健康不安(そして文殊菩薩の諭告)のために入蔵が果たせなかった。この使者が持ちきたった貢物と宴への返礼として、『大日経』と『金剛頂経』の注釈書が送られたのである。

書簡中には、政治的に困難な状況や、家族や人間関係での軋轢や難しさが示されているが、そうした困難ななかでも「心の相」を知り、「自心」を観察することが説かれる¹⁵⁾。いうまでもなく『大日経』の教学が反映されたものといえよう。また Buddhaguhya の教理学の骨子ともいえる「入・住・起」の三心の考え方も見られる¹⁶⁾。

Buddhaguhya の書簡には、龍樹以来の伝統的姿勢である、王に対して十善業道を説く姿勢や¹⁷⁾、『俱舍論』などに説く五煩惱の克服や、『阿含経』から見られる「亀の比喻」など、こうした基礎学の修習を前提としながら、やはり真言乗・金剛乗を推奨する。たとえ余乗を修得しても、真言乗に至らなければ、「あたかも金を求めて土塊を得るようなものである」と説いている¹⁸⁾。

すなわちこの書簡は非常に短いながらも、Buddhaguhya その人の教学と仏者としての態度や性格が凝縮して示されたものと言えよう。

参考資料

- dBa' bzhed* [2000] : The Royal Narrative Concerning the Bringing of the Buddha's Doctrine to Tibet, Translation and facsimile Edition of the Tibetan text, by Pasang Wangdu and Hildegard Diemberger with a Preface by Per K. Sørensen, (Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien
- Tucci, Giuseppe[1950] : The Tombs of the Tibetan Kings, Roma
- Tucci, Giuseppe[1958] : Buddhist Minor Texts 2, Bhāvanākrama, Introduction, Roma
- Wayman, Alex[1983] : Three Tanjur Commentators-Buddhaguhya, Ratnākaraśānti, and Smṛtijñānakīrti, The Tibet Journal 8-3

Buddhaguhya 作『チベット王への師の書簡』について（山本）

- 稲葉正就・佐藤長[1964]『フウラン・テプテルーチベット年代記一』法蔵館
 佐藤長[1959]『古代チベット史研究 下』同朋舎
 長沢実導[1978]「ブツダグヒヤのチベットへの書翰」『瑜伽行思想と密教の研究』大東
 出版社
 羽田野伯猷[1987]『チベット・インド学集成』2、法蔵館
 山口瑞鳳[1967]「チベット仏教」『講座東洋思想』5、春秋社
 山口瑞鳳[1978]「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』3
 山口瑞鳳[1988]『チベット 下』東京大学出版会

註

- 1) Buddhaguhya の書簡には、龍樹『宝行王生論』*Ratnāvalī* や『勸誡王頌』*Suḥṛ-llekha* に見られるような、王に対する仏法の優位と教導という一貫とした姿勢がある。
- 2) 長沢実導[1978: 629-635]
- 3) 羽田野伯猷[1987: 23-69]
- 4) 和訳[18]参照。
- 5) 長沢訳によれば次のとおりである。—「(私は)体力乏しいながらも教法のお陰で無事に五十九(歳)まで転法を行じてきました。六十(歳)には世間を超えて他の王国に生を受けるであります。」
- 6) 羽田野伯猷[1987: 43]
- 7) Khri-srong-lde-btzan の逝去年代の異説については羽田野伯猷[1987: 43]を参照されたい。しかし、学界ではほぼ Khri-srong-lde-btzan の生存年代は 742-797 年で確定されているといえる。山口瑞鳳[1978]参照。
- 8) 和訳[17][18][24-2][28]
- 9) 和訳[13]参照。
- 10) 『勸誡王頌』*Suḥṛllekha*, 123v. 瓜生津隆真訳『大乘仏典 14 龍樹論集』中公文庫、2004, p. 361.
- 11) こうした事情については羽田野伯猷[1987]にくわしい。
- 12) 和訳[12]参照。
- 13) 和訳[13]参照。
- 14) 和訳[14]参照。
- 15) 和訳[19][20]参照。
- 16) 和訳[70][70-2]参照。拙論「『大日経』所説の菩提心について」『智山学報』60, 2011 参照。

- 17) 十善業道については拙論「『大日経』サークルの成立与件」『蓮花寺佛教研究所紀要』2, 2009, p. 42 を参照。『大日経広釈』(*Bhāṣya*, D150b/P187a)で、ブツダグヒヤは「世間の王に十善業道の教勅を説く」というが、これは龍樹以来の伝統を意識している。龍樹は『宝行王正論』(*Ratnāvalī*, 1. 7-10)や『勸誡王頌』(*Suhyllekha*, 5v)のなかで、王に対して法を要約して教示する文脈で、まず十善業道を説いている。
- 18) 和訳[62]。その他、真言については和訳[29][29-2][71][72]参照。

Buddhaguhya 作『チベット王への師の書簡』について（山本）

『チベット王への師の書簡』

凡 例

1. 訳出にあたって sDe-dge (D) 版を底本とし、北京版 (P)、sNar-thang 版 (N) を参照した。適宜、各版のもっともよいと思われる語句を採用し、異同があつて底本を改める場合のみ註に反映した。
2. 本書簡は王／大臣／大修習者／一般僧の四者に送付されているので、宛先毎に区分した。
3. 本文は不規則な偈文体である。王宛の書簡は、9 綴 4 句からなる偈文で 38 詩頌ある。大臣宛の書簡は、11 綴を中心として 9 綴や 13 綴からなる散文調で 4 句×14 文節となる。大修習者宛の書簡は、9 綴からなる偈文で 6 詩頌ある。一般僧宛の書簡は、9 綴からなる偈文で 21 詩頌ある。すべてで 79 詩頌となる。
4. 偈と散文からなる文章であるが、4 句を一単位とみなし、便宜的に通し番号を付し、訳文中に〔上付き数字〕で記した。2 文節の場合は前文に付属する半偈とみなして〔○-2〕とした。どうしても意味が通りにくい箇所は、3 文節、5 文節等を一単位とした。ゆえに必ずしも番号と文章内容とは合致しない。
5. 内容を理解しやすくするため、小見出しを付した。
6. 文中の（ ）は訳者の補訳である。

帰敬偈

聖文殊に帰命いたします。

D135a⁴-
P404b⁴-
N387a⁶-

王宛の書簡

啓奏

チベットの sPrur-rgyalⁱ、全人民の主、Khri-srong-lde'u-btzanⁱⁱ、

i sPrur-rgyal: チベット族の古称。

ii Khri-srong-lde'u-btzan: 742-797. 古代チベット王朝第 5 世。在位 754/755/756-797 年。N, P は一貫として Khri-srong-lde-btzan と表記する。

Ag-tsom-mesⁱⁱⁱの御子息よ。Rlung-nam-'phrulの王の主たる Sron-btzan-sgam-po^{iv}は観自在尊の身であり^[1]、菩薩の身相続は不断です。 N387b
六趣中における大智慧の人、五毒^vを厭う六族すべての根である、
Khri-rje-thog-brtzan^{vi}以降の系譜であります。^[2]

十善の法をたもって教化したまう氏族の化現である、Khri-srong-lde'u-btzan は、汚れた暗い窓を開けるために、インドの金剛座の上で、^[3]釈尊がお説きになった三蔵——それは、アーナンダ等の従者たちが完成して、瞻部洲の道場の中心となって、偉大な福德ある学者を数多育てました——^[4]その聞・思^{vii}の系譜を伴って、福德の少ない王 P405a
国を成熟させるために、聖種^{viii}を具えた者を広くお求めになりました。 D135b

翻訳師のインド派遣

(すなわち) ①Vairocana^{ix}、②sKa-ba-dpal-brtzegs^x、^[5] ③Klu-yi-rgyal-mtsan^{xi}、④Ye-shes-sde^{xii}、⑤E-ra^{xiii}、⑥A-ro^{xiv}、⑦Mañju^{xv}等

iii Ag-tsom-mes: 在位 704-754, 755 年。「髭の祖父」と称される。Khri-lde-gtzug-brtzan のこと。古代チベット王朝第 4 世の別名。

iv Sron-btzan-sgam-po: 569?-649. 古代チベット王朝の祖。在位 617-650 年。または 617 年誕生 629 年即位説。

v 五毒: 六大煩悩のうち見を除いた残りの貪・瞋・痴・慢・疑の五つの煩悩の毒をいう。または後出「五煩悩」をいっている。

vi Khri-rje-thog-brtzan: 前出 Ag-tsom-mes、すなわち Khri-lde-gtzug-brtzan のことであろう。

vii 聞・思: 三慧(聞・思・修)のうちの聞と思をいう。教えを聞いてよく考えること。

viii 聖種: 'phags pa'i rigs. 聖賢の種子の意。仏のあとを弟子が次第に継ぐこと。仏教の血筋。

ix Vairocana: bai-ro-tza-na. 大翻訳師(lo chen)。試みの七人(sad mi bdun)のひとり。試みの七人については Tucci[1958: 13-15]が諸種の歴史資料における異同を挙げて整理している。

x sKa-ba-dpal-brtzegs: 大校閲翻訳師(zhu chen gyi lo tza ba)。『大日経』の訳者。『デンカルマ目録』編纂。

xi Klu-yi-rgyal-mtsan: 翻訳師。Cog-ro Klu'i-rgyal-mtsan。

xii Ye-shes-sde: Zang sNa-nam Ye-shes-sde. 大校閲翻訳師。『翻訳名義大集』編纂。上記の三者 sKa-ba-dpal-brtzegs, Cog-ro Klu'i-rgyal-mtsan, Zang sNa-nam Ye-shes-sde の三人は、sKa Cog Zhang gsum と称され、前伝期における三大翻訳師である。

xiii E-ra: 不明。あるいは E-ra A-ro Mañju でひとりかもしれない。

Buddhaguhya 作『チベット王への師の書簡』について (山本)

に、最上の財である金・銀・財宝を預けて、インドの正法獲得へと派遣いたしました。^[6]

チベットの暗闇と暗い窓を開く、国政の権力の頂点を、私 Buddhaguhya は実にお慶び申し上げます。

チベット招聘の辞退

あらゆる不正を糾す政府は、^[7]たゆまぬ翻訳を継続中であって、lDe^{xvi}氏、君主 Khri-srong-lde'u-btzan の治世において、俗法と仏法の権力の頂点に騎乗したまい、輝く宝の身体の蘊において、^[8]呼吸・熱・咽に併発する重病と、千八十の障害によって追及されることなく、'Jam-dpal^{xvii}と Mu-ri-ta^{xviii}に一任され、Yas^{xix}の地に私ごときを招聘してくださいました。^[9]

私は身体が衰えて^{xx}不自由であり、聖文殊菩薩の仰せでは、「チベットに汝が旅立てば命を失うであろう」と諭されました。

『金剛頂経』・『大日経』の注釈書の送付

私は不自由ながら、地位と借財への返礼として、^[10]『入瑜伽口訣』^{xxi}をお送りします。使者二人^{xxii}の宴の返礼として、『現等覺タントラ

xiv Aro: 不明。

xv Mañju: mañdzu. 試みの七人のひとり。dBa' Mañjuśrī, dBa' gSal-s nang, Yeshe-sdbang-po.

xvi lDe 氏: 古代チベット貴族の名門の家系をいう。

xvii 'Jam-dpal: Mañjuśrī. 前出 Mañju. 羽田野伯猷[1987: 34]が指摘するように、この二人に Buddhaguhya は『曼荼羅法略撰』*dKyil 'khor gyi chos mdor bsdu pa* (Toh3705/Ota4528) を送っている。奥書に「インドの賢者 Buddhaguhya が、dBas (dBa') Mañjuśrī と Bran-ka Mu-ti-ta に送ったものを、チベットで Lotza-ba Ka-ba dPal-brtzegs らが翻訳した」と記す(D5b/P6a)。

xviii Mu-ri-ta: *mKhas-pa'i-dga'-ston* は Bran-ka Mu-ti-ta とする。おそらく上の註からも Mu-ti-ta の表記の方が正しいと思われる。

xix Yas: bSam-yas. bSam-yas 寺院のこと。779 年建立。

xx 身体が衰えて: sku mnyel lags te. N, P. sku gnyer. Skt. kāyajīva. 香灯師、寺中管理人。長澤[1978: 634]は僧院管理職と考え、「Nālandā の僧院長又は密教学部長であったのだろう」とする。

xxi 『入瑜伽口訣』: Man ngag yo ga a ba ta ra. Toh2501/Ota3324. *Tantrārthavātāra*. 『タントラ義入』

xxii 使者二人: 前出 'Jam-dpal と Mu-ri-ta のこと。

釈』^{xxiii}——内外両者の多くの実践のすべてを、^[11]一つも残さぬ一切の事業——をお送りします。観察・思惟を行なうときは他所に移られるのがよいでしょう。 N388a

チベットの政治的混乱

チベットの民は、学匠を受容するのに性急であって、あらゆる見解に対して騒然となっています。^[12]

過失をわきまえず、正法を破却せしめては、地獄の因を増やして (仏)果を絶やすことになります。内外両者の実践を飾り立てて、宴において二度の生をもって利他を為してください。^[13] P405b

Khri-srong-lde'u-btzan よ、Yas の甥の、二人の羅刹の二人の子は、正しい方向を断ち切り、チベットの王国の政治の城堡も、文官以下の政治の城堡は崩れつつあります。^[14]

職務は少なく、普通の女性^{xxiv}を妻に娶り、四方周辺をくまなく乞い歩いています。^[15]王の夏(安居)には外出して遊び、普通の女性を求めて村で食を乞い歩いています。あちこちに行っては、あらゆる客人と貴賓を計って、自国民のごときは、奇異でないと言って向かわず、客人のようにどこでも寝てしまいます。^[16] D136a

翻訳事業の推進

四方に転じた聖者が翻訳した法を、王が説くのは功德であると言われるから、すべて君主のために説かれた三蔵の伝承は、王の御子息の恩恵となります。^[17]

力少なき身体において、伝承を余すことなく、59 歳まで翻訳を行なってください。60 歳には出世間して、他の王国に生を受けることになりましょう。^{xxv}^[18]

xxiii 『現等覚タントラ釈』: mngon par byang chub pa yi tan tra bshad. Toh2662/Ota3486. *Vairocanābhisambodhi-tantra-piṇḍārtha*. (『大日経略釈』) または Toh2663/Ota3487. *Vairocanābhisambodhi-mahātantra-bhāṣya*. (『大日経広釈』(*Bhāṣya*))

xxiv 普通の女性: dmangs mo. ローカーストの女性。Skt, *vṛṣālī*.

xxv 『フウラン・テプテル』『明示鏡』などの資料には Khri-srong-lde-btzan は

自心の相を知るべきこと

六趣^{xxvi}・貴賤のどこにでも生じる、自然智の王は自在であります。「事物の知識は智慧のなかでは貧しく、心の相^{xxvii}を知ることが富である」と言われます。^[19]それゆえに心の相をよく了解してください。心は、宮殿・猿・電光であって六種の因^{xxviii}であります。「貴賤いずれの趣であっても、自心こそ自在であり、懈怠せず、自心を觀察しなさい」と言われます。^[20]

N388b
P406a

論の教誡と口訣の解説を、王が普及すること少なければ、後に城の礎は縮小します。一人の妃を受け容れるには、小さな目をターコイズで飾って美しくして、^[21]また一途に愛して親切にするものです。

仏教迫害の停止・仏典翻訳の規準作成

赤面^{xxix}の羅刹^{xxx}、チベットの国民は、三昧耶を損ない、約束を破り、知識は粗略であり、熟考^{xxxi}することが少ないから、^[22]過去に行なったこと^{xxxii}を無きものにしてよいと言っています。福德の大なるところに如意樹は生育します。福德の少ないチベットの王国では、ターラー樹もなお生育いたしません。^[23]樹を迫害し断ち切ってしまうのはお待ちなさい。僧院・塔・樓閣等を、あらゆる威嚇、その迫害から解放するのです。^[24]正法を翻訳・校正すること等を行なってください。同時に基準^{xxxiii}をつくるのです。^[24-2]

「56歳の丑の歳」に没したと記する。また羽田野[1987: 43-44]は Khri-srong-lde-btzan の没年の異説について列挙し、「パドマの伝記」だけが 61 歳丑の歳逝去説を挙げていることに着目し、この点をもって「後世のインド仏教系の手になることを物語ると思われる」と偽作説を支持する。

xxvi 六趣：N, P. 'gro ba rigs drug. D. 'gro ba ris drug. N, P により改める。

xxvii 心の相：sems kyi mtsan nyid. こうした心の相と自心の觀察を説くのは、『大日経』の教学を伺うことができる。

xxviii 六種の因：能作因・俱有因・相応因・同類因・遍行因・異熟因。この六因に五つの結果があることを六因五果という。

xxix 赤面：gdong dmar. 赭面人。チベット族の古称。

xxx 羅刹：N, P. srin po. D. srin bu. N, P により改める。

xxxi 熟考：D. brnags. N, P. rna.

xxxii 過去に行なったこと：父王 Khri-lde-gtzug-brtzan の仏教保護政策をいつているのであろう。

xxxiii 基準：tsad ma. Skt. pramāṇa. すなわちのちの『翻訳名義大集』Mahāvvy-

反対勢力への対応

王の本質を他者に話してはいけません。建設・忍耐・慎重さを堅固につとめてください。心を大らかにして、内大臣の勇気ある人たちに
D136b
対して、目的は愛護であることを十分に話して理解させるのです。^[25]

政治を損なう助言は耳ざわりです。傲慢はいけません。温和にくりかえし話し、重要なことを奨励して、大臣たちには大小を適切に扱うように諭すのです。^[26]大臣の欲望は水のように抗しがたいから、政治の城堡を壊すのはまちがっています。政治によって誰かを降ろすときには、息子^{xxxiv}をあきらめずには障害を避けられません。^[27]翻訳(事業)
P406b
が王侯貴族の耳に入ったとして、半分だけ特別に請け負うのさえ聞き苦しいのです。政治の水辺を観察すればきりがありません。

真言乗の奨励

「三宝を眼のように扱え」と言われます。^[28]一切の乗に入る門は各別であり、一切の門から果は得られますが、(何より)真言・金剛乗をお受けください。^[29]導くために一切に行道を示す、金剛乗をお受けく
N389a
ださい。^[29-2]

自他平等の理念

南方には羊毛や理知があるのに、信じることなく、墓地^{xxxv}を据えた場所は、すべて除かれず壊れて危険であって、いいかげんなことを行なえず悲嘆に暮れているといわれます。^[30]王妃^{xxxvi}たちと他の娘たちに関しては、貪欲なる本質を後々まで欲するものですから、心が惹かれるものを過度に行なってははいけません。私とあなたは一緒であっ

utpatti のようなものを想定したものと考えられる。

xxxiv 息子：Khri-srong-lde-btzan には 4 人の子があった。第 1 子 Mu-ne-btzan-po は 29 歳で母によって弑された。第 2 子 Mu-khri-btzan-po は幼少のときに亡くなった。第 3 子 Mu-tig-btzan-po は政敵を殺したために宮殿を追放され、のち復帰するが暗殺された(795 年)。第 4 子 Khri-lde-sron-btzan(Sad-na-legs)が王として即位した。

xxxv 墓地：N, P. bang so. D. bod so. N, P により改める。

xxxvi 王妃：第 1 子が母によって弑された点からも、先祖の伝承をめぐって、王位の篡奪が当時行なわれていた。

て、上下はないのです。^[31]信頼することなく目的は果たしえませんが、
 食事の準備をするのに甘美なものを給仕することはありません。敬意
 をもって向かってくる民に対しては公平であることです。^[32]他者を顧
 みずに他の村を屈服すれば自らも進むことがないのです。^[32-2]

海の徳

王の本質は海の水の如くであって、不具な手を四方に広げることで、
 再び王の本質をそのまま成就するのです。海により、あらゆる仏法に
 より六趣を捨てなさい。不具な手で四方を利益して舍利を得るのです。
^[33]光明がまた再び集められるように、潤いが芽を生じるように、広
 く会議を興すのです。水によって果実が熟するように、勝法を成就し、
 海が不動であるように不動であるべきです。^[34]水が柔軟であるように
 心を柔軟にすべきです。海の深さが測りがたいように(心は)量りえな
 いのです。大水が覆ることがないように政事を行なうべきです。海が
 すべてにゆきわたるように手をさしだすのです。^[35]水を飲んで満足す
 るように他を満足せしめるべきです。海が諸流を集めるように仲間を
 集めるのです。水が影像を映しだすように明瞭であるべきです。^[36]あ
 たかも海がこのような功德を持っているように、一人の王の身に具わ
 るようになれば、sPu-rgyal チベット王の栄光の系譜において、全人
 民の主として任ぜられたといわれましょう。^[37]

P407a

D137a

結び

急いで出したこの教誡を御前に送付いたします。君主・国王の暗闇
 の窓としてください。非時をつねに心に留めておくよう願います。^[38]

N389b

諸大臣宛の書簡

政治の開放と経済の振興

諸大臣宛に送付します。

心はゆったりとして発言を厳しくすれば大臣は理解します。墮落し
 た政治を広く開放し、人の肉声を聞き、商業を大きくして固めれば、

すべてはさらに強くなります。^[39]公正さと慈しみの眼を隔たってしまう
えば、政治は終わりです。学徳を讃美し、軽んじないことが子ども
(将来)の宝となります。悪心あって巧言を為す大臣は怖ろしく、慈愛
ある僧を担う大臣は法とともにあります。^[40]

敵とすべきは自己である

あまねく平等に食物を給して他を慈しみ、教化して布施できる人を
友として求めるのです。すぐに怒りで応えて敵対してはいけません。
甚深の兵法で敵とすべきは自己なのです^{xxxvii}。^[41]不敗の敵軍を統率す
れば敵は戦きます。信任する人に息子のように従う人こそ堅固なので P407b
す。倏約して食物の門を広くすれば国民は考慮して、包括するあらゆる
状況を受容して、言うことを聞くものです。^[42]

宰相の資格 妻・助言者としての徳

功德ある人に供養するならば福德は大きく、智慧ある人に学び修習
すれば賢明になります。喜ばしい人に慈しみをそそいで語れば心から
信頼されます。どんなに妻が賢くても助言する智慧には向きません。
^[43]人はすべて名声ある人も大悪人も滅びます。何であれ分を弁え上
達するまであきらめずに自分の道を為す者が賢明なのです。過去に行
なったことを悔やまずに理解すれば人の宰相であり、権謀巧みな敵に D137b
対して分裂させる宰相は勇者であります。^[44]巧言は大きく心の耳が小
さい人は智慧に不向きであり、聞く耳が正直であれば信者は増えます。
父母が宝物を捧げ持てば自らの荷となり、悪人たちに敬意をもって向
かえば下劣の基となります。^[45]敵に対して忍受すれば後々敵は怖ろし
く、心の耳が小さい人に対しては信を置けません。妻の顔色を気にか
ける者に耽溺してはいけません。卑賤^{xxxviii}の家柄が混ざった、距離
を置く妻は和合のしるしです。^[46]ことば柔和に心広く語り、その分に N390a
適うならば賢明であり、勇ましく大方信用できる者といわれます。賢

xxxvii 敵とすべきは自己なのです：慣用表現「自己こそ自己の敵である」*Bha-*
gavadgītā 6. 5

xxxviii 卑賤：N, P. *skye'u*. D. *sge'u*. N, P により改める。

明な言葉で敵に配慮すれば、親族の威厳は増し、(敵の)不利益な行ないが自分の利益のようになれば狡猾さは減ります。^[47]自分の利益を放置して不利益を為す者は無常であり、愛想を損なった忿怒の形相は無常(と悟る)ならば立派な女性です。柔和な助言が、もし切断や制止を強いるものならば、その助言を月とすべきです。勇健にして、睡眠を減らし、手を浄めて、道を伴侶とすべきです。^[48]遠近どこにでも行って友と会い、快活を保ち、慎ましい仲間こそ幸福です。すばらしい父と叔父の子が円満であれば父祖の教えを増します。すぐに相争い怒号かまびすしい人と会うのは禍いです。^[49]

P408a

不和を為すことなかれ

すばらしい父方の親族の間に生まれた悪人は自尊が甚だしい。口が下劣ですべての隣人に嫌悪される人は苦痛であり、嫁たちと不和を為す皿洗い(のようなもの)です。悪行を息子がしたら、その都度指導して引き上げなさい。^[50]父において悪く子において悪ければ、指導のあと喧嘩となります。かつての勇士も怒ったならば人間となるのであって、敵もまた推量されます。甘い妄語の言葉は誉められません。説教を聞かないなかで説教するのは愚かなことではありません。^[51]

禍いなるもの

また自己を知ること少ない(弱輩)者が功德を具えていることを責めるのは悪です。先祖の功德を説く自らの悪い子ども xxxix は天災です。心から後悔する親族を憎む、悪い債権者は畜生です。恩知らずで自尊甚だしい者は愚かです。^[52]信任することなく行動する者は狂乱者です。捨てられた食物を争っている者は禍いです。^[52-2]

xxxix 子ども : N, P. bu. D. spu. N, P により改める。

大修習者宛の書簡

三蔵の精査

偉大な修習者たち宛に送付します。

道理や法を行なわずに智地は得られません。あらゆる三蔵について精査すべきです。見た言葉を調べるのではなく、意義を観ずるのです。 D138a

教えに精通した阿闍梨たちと会うのです。^[53]偉大な修習者というのは洞窟にあるものではありません。信じることなく修習する道理はありません。疑いを断って聖者の仰せを見て、疑いを断ち切って智慧を見なさい。^[54]修習の迷いの障害を断って意義を悟るのです。 N390b

つつしむ徳 亀の比喻

亀^{xl}は堅い殻のなかにいるのであって、伸び縮みする動物は他によって見られないように、周囲によって引っ張られることなく寂靜に住します。^[55]実体・意義・業を昼夜現すべきではありません。よい妻はまた修習を覆うべきものではありません。騒がしい悪い仲間に親しむべきではありません。自心を証しとすることに散漫であってははいけません。^[56]散乱や昏沈が減したり現れたならば、偽善を為さず諸師に聞くのです。 P408b

一切平等の印

一切平等の心髓となった印は、何であれ愛着が無功用・平等となるのです。^[57]そのような大修習者は諸仏と等しいのです。非時・常に心にこの教誡が、諸々の大修習者たちの心に昇るように願います。^[58]

xl 亀：亀は蔵六といって、頭・尾・両手足を甲羅のなかに隠して身を護る。沙門も同様に身を慎むべきことが古くから説かれる。たとえば『長阿含経』大正 1, 47b、『雑阿含経』大正 2, 160c、『法句比喻经』大正 4, 584b、『出曜经』大正 4, 730c、『涅槃经』大正 12, 370b など。

一般僧宛の書簡

十善業・三智の実践

すべての僧たち宛に送付します。

十不善を離れた十善業は、身口意の三者を四季に移ろわざるものとします。甚深なる正法のために命を投げうちなさい。賢者なるもの智地にとらわれず、^[59]自らが知ったことも疑って、他に聞き、法の存在は三地^{xli}を思惟するとおりに、満足してはならず(聞・思・修の)三智によって学び、決定して自己においてなく、他なしと学ぶのです。^[60]護るのは三種であって、言葉のとおりに護るのです。金剛阿闍梨を本尊のように敬うのです。甚深の口訣を眼のように愛護するのです。^[61]

八つの喩え 煩悩の制御

- ① 一切の乗においても真言乗においても巧みで、他を知ること、そこに至らない僧は、余乗を知り、また真言乗に至ることなければ、あたかも金を求めて土塊を得るようなものです。^[62]
- ② 五煩悩^{xlii}を生生世世に断たず、尊者を生生世世に断つことは哀れです。煩悩を捨てないことと尊者であることは両立しません。あたかも種子が腐った果実のようなものです。^[63] P409a
- ③ 五煩悩や(三)毒の幹を引き倒さず、いびきをかきながら本尊を敬礼するのは哀れです。(三)毒の幹を引き倒さずに食を守ることは両立しません。あたかも黄柏の棘に旗が引っかかるようなものです。^[64] D138b
- ④ 五煩悩の世界を取り囲むことなく、塔を回るのは哀れです。法界の不見と転とは両立しません。あたかも酪を求めて寺院を犬が回るようなものです。^[65] N391a
- ⑤ 五煩悩は不浄です。顔を洗って手洗いに行くのは哀れです。不浄

xli 三地：初地、二地、三地のこと。

xlii 五煩悩：nyon mongs lga po. 五下分結といい、下位の領域に結びつける五つの束縛。欲貪・瞋恚・有身見・戒禁取見・疑のこと。『俱舍論』などに説かれる。

と洗淨とは両立しません。あたかも葉草が大麦によって根絶されるようなものです。^[66]

- ⑥ 五煩惱を静めることをせずに、法性を静めることを観察するのは哀れです。(煩惱を)静めないことと観察とは両立しません。あたかも雨のない状態が続いている若芽^{xliii}のようなものです。^[67]
- ⑦ 五煩惱の頭頂を剃らないで、頭を丸めて肩をむき出しにするのは哀れです。煩惱を剃らないことと僧であることは両立しません。あたかも暗闇のなかで物を探すようなものです。^[68]
- ⑧ 五煩惱を制御せずに、外の敵軍を打ち砕くのは哀れです。制御しないことと阿羅漢^{xliv}であることは両立しません。あたかも険しい山や断崖から逃れて掌握するようなものです。^[69]

甚深なる法性を観察して通達すべきです。行者とは、利他と禪定をつねに断たず、智慧の利剣で生生世世に切る種族です。五煩惱をもって起・住に入り、^[70]くりかえし起を行ずれば法性を思惟し、利他を思惟することに決定して入るでしょう。^[70-2]

P409b

真言を法器に伝えるべきこと

自己に自在ならずして他に灌頂してはいけません。三時に法の相を智慧に置くのです。甚深なる真言を当地の人^{xlv}に教えてはならず、鼓や鈴も打ち鳴らさない。上々の賢い羊を屠ってはいけません。^[71]多くの男女のなかで成就を行なうのは恥ずかしいことです。食財・甚深なる真言を報酬として売るのは狂っています。真言・禪定・本尊を売買すべきではありません。僧の本質は村の中央にあるものではありません。^[72]商売において不食は罪惡の基となります。男を上にしにない妻の信仰はまた減らしなさい。多くの牛を保持しないのは罪惡の原因です。昼夜なく利他を行なおうと願うことによって、^[73]自心を浄めれば、願

D139a

xliii 若芽：N, P. ljang bu. D. ljong bu. N, P により改める。

xliv 阿羅漢：N, P. dgra bcom. D. dra 'joms. N, P により改める。

xlv 当地の人：grong yul mi. これがたんに田舎者というような意味か、あるいはチベット人一般をさすものかわからない。真言法を売買して生活する者がいたことが知られる。

Buddhaguhya 作『チベット王への師の書簡』について（山本）

うところの目的が成就し、在俗の多くの人の利他も(成就します)。商 売はあってはならず、まさに禪定を行ないなさい。これらを誤りなく知る者が僧であります。^[74] N391b

精進・三昧に専念すべきこと

毎日、念誦を断つことなく倦むことなかれ。一心に真剣に受けとめるべきです。賢者の本質は、利益に巧みなことです。たんに言葉に賢明な者は、言葉をしゃべるのがうまいオウム^{xlvi}にすぎません。^[75]一心に正しい真実の風のなかに、自心を自由に放つことを忘れてはいけません。昼夜なく法の利益について、三時を摂めることから離れず^{xlvi}に三昧を為すべきです。^[76]

金剛阿闍梨への帰敬

大智慧や賢者の地は摂取されがたいのです。金剛阿闍梨を本尊のように支えて、一心に本尊そのものとしなさい。そこから離れず、慈しむ時間に親しむのです。^[77]真実を教える金剛阿闍梨は、眼のように恭敬する本質であって、悪い仲間を阿闍梨は除かしめます。聞を行なわない愚か者は猿と言われます。^[78] P410a

結び

これらは私(Buddhaguhya)が要のみ示したものであって、チベットの王土と僧侶の心に、この教誡があまねく輝くように願います。^[79]

跋文

大阿闍梨 Buddhaguhya がチベット王 Khri-srong-lde'u-btzan と君臣と、チベットの尊者たちに送った書簡である。信仰を生ずる灯明であります。

xlvi オウム：N, P. tzo. D. tso. N, P により改める。

xlvi 離れず：N, P. mi 'bral. D. mi 'brel. N, P により改める。

智山学報第六十二輯

〈キーワード〉 Buddhaguhya、Khri-srong-lde-btzan、書簡、8世紀チベット

〔付記〕「チベット王への師の書簡」を訳出するにあたり、クンチョク・シタル師によく意味がわかりにくい箇所を教えてくださいました。論責は私個人にあることは言を俟ちませんが、ここに記して感謝申し上げます。